

〔巻頭言〕

サバ州のタムー（定期市）

宮本 勝

サバ州の見どころの一つは、一般にタムー(*tamu*)と呼ばれる定期市だ。州都コタ・キナバルのジャラン・ガヤは小さな通りだが、日曜日になると早朝から野菜や果物、菓子類、衣服などの日用品を売る露店が立ち並び、地元の人びとや観光客でにぎわう。この日は、コタ・キナバルの北方に位置するトゥアランやコタ・ベルッドの町でも大規模な市が開かれる。

定期市場はサバの西海岸地域に点在している。1970年代初期には計100以上の場所で定期市が開かれていたが、今日、その数は半減してしまっている。現在、コタ・キナバルのすぐ南の行政区ペナンパンでは、ドンゴンオン(Donggongon)とプタタンの町でそれぞれ木・金曜日と土曜日に市が開かれる。ペナンパンの住民の大半はカダザンで、彼らは定期市をバディ(*badi*)と呼ぶ。

ドンゴンオンとプタタンでは、定期市専用の建物がパサール（常設市場）の近くに設置されている。市が開かれると、この建物のなかと周辺は、日用品を売る人びとと買い物客で埋め尽くされる。さまざまな民族がそこに集まるが、カダザンとドゥスンは農作物・生薬・タバコの葉などを売り、チャイニーズは豆腐・米・コーヒー・工具、バジャウは海産物、ブギスはケーキ・菓子類、インド人・パキスタン人は化粧品・装身具・時計・電気器具を売る、という具合におおよそのレパートリーが定まっている。

70年代初期は、まだ道路が整備されておらず、状況が今とはだいぶ異なっていたようだ。当時の移動手段はもっぱら徒歩と船であり、その頃のペナンパンではイノボン村(Kg. Inobong)の定期市がもっとも栄えていた。この村の市は、プタガス川のすぐそばで10日ごとに開かれた。プタガス川は山地から発し、カダザンが稲作を営んで住む平地をとおって、南シナ海に向けて流れる。海岸地域は漁業を営むイスラーム教徒のバジャウが住む場所だ。

タンブナン行政区のスンスロン村は、イノボン村から南東に数十km離れた山地にある。この地域の人びとは、かつて年に1、2度（米の播種儀礼・収穫儀礼の

前)、15〜20人ぐらいの親類・仲間とチームを組んで約2週間の旅に出た。行き先はイノボン村だ。各自が50kgもの白米を籠に詰めて背負い、山道を下った。ひじょうに骨の折れる旅だったという。イノボン村の定期市にはバジャウが船に乗ってやって来る。山の人びとは、彼らから米と交換で塩や干し魚を入手する。

タンブナンの山地民にとって、農耕儀礼にジャロック (*jarok*: 生の豚肉に塩をまぶして醗酵させた食べ物) が欠かせない。ジャロックがなければ農耕儀礼が成り立たないという。2週間の骨の折れる旅は、ジャロックに必要な塩を手に入れるためだった。バジャウは塩や魚と交換で山地民と平地民から米や野菜を入手して海に戻る。

サバの定期市は、山の民と海の民と平地の民が会う場であった。70年代半ばに道路が整備され、乗用車やバスで簡単に町に買い物に出られるようになった。それにもなって村の定期市は徐々に閉鎖されてしまった。それでも町なかの定期市は今も安泰だと言える。何よりも値段が安く、市が立つ日は近くのスーパーマーケットもお手上げだ。しかも定期市に行けば親類や友人に会える。定期市は憩いの場でもある。近い将来サバの定期市は消え失せてしまうだろうという研究報告もあるが、そう簡単に無くなるとは思えない。

